國學院大學学術情報リポジトリ

〔取り組みリポート〕基礎演習A・Bにおけるルーブリックの作成と授業導入に向けた取り組み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 広和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002139

取り組みリポート

基礎演習Ａ・Ｂにおけるルーブリックの作成と授業導入に向けた取り組み

星野　広和

【要　旨】

本稿では、経済学部の初年次教育である基礎演習Ａ・Ｂにおいて、ルーブリック（学習評価基準および学習到達度）を作成し、授業導入に向けた取り組みについて紹介する。ルーブリックは、経済学部が目指す教育方針・目指すべき学生像の状態に合うものを教員および学生の指標として設定したものであり、これを教員だけでなくFA（学生ファシリテイター＆アドバイザー）にも共有することによって、授業の標準化と教育目標の徹底を図った。

【キーワード】

ルーブリック、FA制度、教育観の見える化、授業の標準化、教育目標の徹底

１．はじめに

本稿では、経済学部の初年次教育である基礎演習Ａ・Ｂにおいて、ルーブリック（学習評価基準および学習到達度）を作成し、授業導入に向けた取り組みについて紹介する。ルーブリックは、経済学部が目指す教育方針・目指すべき学生像の状態に合うものを教員および学生の指標として設定したものであり、これを教員だけでなくFA（学生ファシリテイター＆アドバイザー）にも共有することによって、授業の標準化と教育目標の徹底を図った。

２．基礎演習Ａ・Ｂの課題と平成30年度事業の概要

（１）学生ファシリテイター配置授業

昨年度に引き続き、平成30年度の学部学修支援事業もまた経済学部のグループワーク形式授業、特に基礎演習Ａ･Ｂの実施において、その教育効果を挙げるためにFA（学生ファシリテイター＆アドバイザー）制度を活用している。現在、課題解決型授業（PBL）といわれるグループワーク形式の授業を実践する際にFAを各クラス１名ずつ配置し、学生の議論の活性化を促すとともに、学習支援も行うことを目的としている。対象となる授業科目は「基礎演習Ａ」（１年前期）、「基礎演習Ｂ」（１年後期）、「経営学特論（ビジネスデザイン）」（２年前期）、「経営学特論（リーダーシップ）」（１年後期）、である。

（２）基礎演習Ａ・Ｂの課題

平成27年度から「アクティブラーニング形式」（以下AL型式と略）の授業トライアル

を導入し、平成28年度から全23クラスへ展開している。しかしながら、基礎演習A・Bの課題として、①基礎演習担当教員およびFAのスキルのバラつき、②教育ノウハウ（例えば，ファシリテーションスキル）の蓄積が不十分であること、③各クラスの運営におけるバラつき、が指摘されており、基礎演習全クラスの標準化および均質化には従前より課題があった。以上に加えて、④教員間でのゴール像や獲得ステップが不明確で共有されていないこと、も課題として挙がった。そこで、教員同士はもちろんであるが、FAとの共有を行い、学生への学習支援につなげていくことを図った。

（3）平成30年度事業の概要

平成30年度の学部学修支援事業では、上記の課題の解決を図るために、平成29年度に経営学特論においてルーブリックの作成や教員研修を担当したand seeds社に業務活動を委託し、「教員を巻き込みながらルーブリックを作成するとともに、その導入と実行支援においてFAを関与させる」ことを目的とした。その内容は、以下の４点に集約される。①ルーブリックの作成支援（教員の教育観の見える化およびその共有、受講生が授業を通じて獲得すべきスキルの明確化）、②ルーブリックの授業導入支援（ルーブリックを活用する上でのルール作りと具体的な測定方法のトレーニング）、③AL型授業の学習法の改善・発展支援（ルーブリックの到達度合いを高められるよう教員に対して教授法を指導）、④ルーブリックの授業導入についてFAとの共有、である。これによって、学部共通の到達目標・評価基準の整備、アセスメントの構築を行った。

３．ルーブリック作成プロセスについて

（1）ルーブリック作成プロセス

ルーブリックは経済学部のカリキュラムに従い、学部が目指す教育方針・目指す学生像の状態に合うものを教員および学生の指標として作成した。ルーブリック作成を通して、育てたい学生像やそのために身につける力（提供する知識や技術）の基準・状態を明確にし、その先に、①各自が重要だと思う状態目標を捉えて、学生の状況を把握することができる、②各自が重要だと思う状態目標を捉えて、自分の授業プロセスや内容を振り返ることができる、③自分の授業で発展させたい力を考え、授業デザインをすることができる、④共通認識を持ち、教員同士で議論できるようになる、ことで基礎演習に対する教員の認識、目指す成果を合わせて一枚岩として進むことが目標とされた。

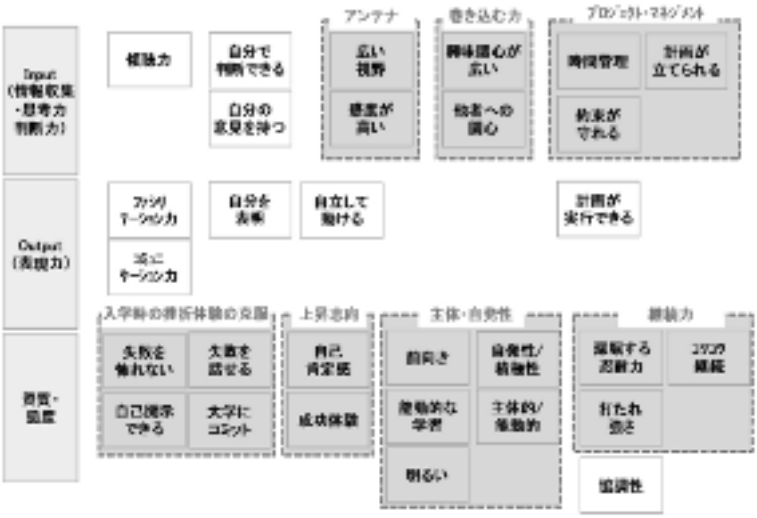
具体的な作成プロセスにおいては、①ビジョン・メイキング（個人・組織の教育観を明らかにし学部の核（共通価値や教育方針）を描く、②課題の明確化（教員の知識や経験を堀り起こし、育みたい学生像に向けての課題の明確化と、課題が求める具体的なスキルや知識を設定する）、③評価尺度・観点の設定（ルーブリックに用いる項目（状態目標）を具体化する。既成のルーブリックとの比較などから、学部オリジナルの方針を強化）、に

ついてand seeds社のサポートによって進められた。

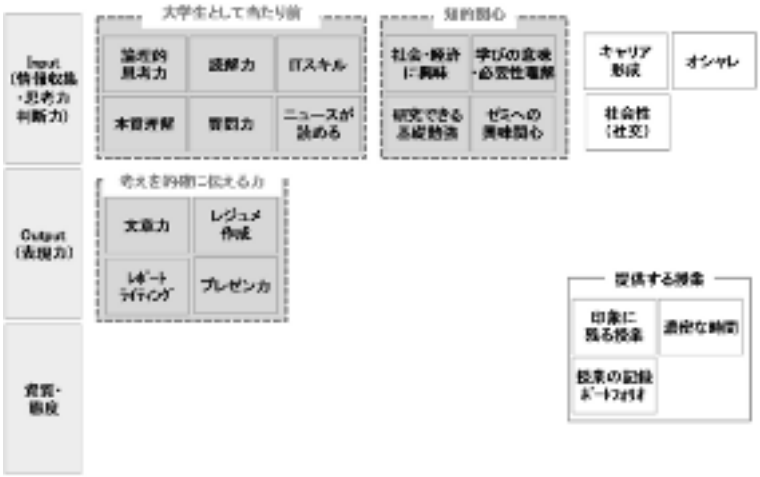
（2）ルーブリック項目

そもそもルーブリックとは、「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具であり、課題をいくつかの構成要素に分け、要素ごとに評価基準を満たすレベルを詳細に説明したもの」として捉えられる。まずは、ルーブリックにおけるビジョンづくりに関する第１回研修において、学生に身につけてほしい「ジェネリックスキル/態度」「アカデミックスキル/態度」を明確にするため、ブレインストーミングを行なった（図表１、２参照）。これを踏まえて、サポートチームが情報整理、言語化した。

図表１　身に付けて欲しいGenericスキル・態度



図表２　身に付けて欲しいAcademicスキル・態度



キーワードは、自主性・主体性、自信・自己肯定感、学習ができるような作法、学習習慣の定着、であった。

次に、ルーブリックのための課題の明確化に関する第２回研修会において、①基礎演習Ａ・Ｂのルーブリックのコンピテンシー（理想とされる学生の状態）について、教員の知識や経験を棚卸してから育てたい学生像に向けての課題の明確化と課題が求めるスキル／知識を言語化し、②これまでの基礎演習Ａ･Ｂにおける教員自身の行動や思考を俯瞰した。結果として６つの評価観点と３つの評価尺度からなるルーブリック項目が完成した（図表３、４参照）。評価観点としては、（１）「基礎的学習スキル」、（２）「コミュニケーション力」、（３）「思考力･判断力･表現力」、（４）「課題発見･解決力」、（５）「関心･問題意識の醸成」、（６）「目標設定の視座」を設定し、基礎演習Ａ・Ｂでは多少評価観点と評価尺度においてウェイトと表現上の差異[1]を設けた。

図表３　ルーブリック（基礎演習Ａ）

No	評価観点	ウエイト	評価尺度		
			基礎演習A		
			要再学習	良（ベース）	優秀
1	基礎的学習スキル	25%	大学で学ぶ際に求められる、情報検索やレジュメ作成、レポート作成、プレゼンテーションのスキルについての理解が少しく、用いることができない。	情報検索やレジュメ作成、レポート作成、プレゼンテーションのスキルについて、どの様に進めるのかは理解しており、一部できない部分もあるが、最後まで用いることができる。	情報検索やレジュメ作成、レポート作成、プレゼンテーションのスキルについて、進め方をしっかりと理解し、学習の目的を問題なく達成できる。
2	コミュニケーション力	20%	・他者に対して主体的に自分の意見を伝えたり、傾聴や質問といった働きかけができない。	・他者に対して主体的に自分の意見を伝えたり、傾聴や質問を用いながら、適切なコミュニケーションができる。	・意見が異なる他者に対しても主体的に自分の意見を伝えたり、傾聴や質問を用いながら、表面的な言葉のやり取りだけでなく、表現されていない行間や、意図にも配慮したコミュニケーションができる。
3	思考力・判断力・表現力	20%	不正確な情報に基づいており、しかも情報を整理・分析することができず、思考も表面的に留まり、上手く説明することができない。	情報のレベル感（粒度）を意識して、情報を整理・分析し、まとめることができ、論理的に思考し、説明することができる。	正確な情報に基づいて、情報を整理・分析し、そこから傾向や意味合いを見出すことができ、論理的な意思決定をしたり、説明したりすることができる。
4	課題発見・解決力	15%	取り組むべき課題とその原因を理解/特定できておらず、解決策を提案できない。	取り組むべき課題とその原因を正しく理解し、論理的に矛盾のない、解決策を提案できている。	課題の原因について、より深く・広く多面的に把握し、論理的に矛盾のない、効果的な解決策を提案できる。
5	関心・問題意識の醸成	10%	授業の内容や学習課題について、関心を持てない。	授業の内容や学習課題について、自分なりに関心を持てる点を探し、取り組んでいる。	授業の範囲にとどまらず、自分の関心・問題意識に結び付けながら、より深く・広い学びに主体的に取り組んでいる。
6	目標設定の視座	10%	授業で設定されている目標を理解できておらず、達成しようという意欲を持てない。	授業で設定されている目標を理解し、達成することができる。	自分で目標設定ができ、授業で設定されている目標以上の成果を達成できる。

基礎演習Ａでは、「大学の学びを深める上でどのような姿勢や態度、心構え、スキルが必要になるのかを知り、特に、一個人や１対１の関係性の観点から、それらの発揮の仕方を学ぶこと」が目標とされ、「基礎的学習スキル」「コミュニケーション力」といった、主にジェネリックスキル／態度に関するウエイトが高くなっている。

図表４　ルーブリック（基礎演習Ｂ）

No	評価観点	ウエイト	評価尺度		
			基礎演習B		
			要向学習	良（ベース）	優秀
1	基礎的学習スキル	15%	情報収集やレジュメ/レポート作成、プレゼンテーションのスキルについて、部分的に用いることができるが、全般的に不足している。	情報収集やレジュメ/レポート作成、プレゼンテーションのスキルについて、基礎力をしっかりと理解し、学習の目的を妥当なく達成できる。	情報収集やレジュメ/レポート作成、プレゼンテーションのスキル全般について、的確し、高いレベルでアウトプットを作成することができる。
2	コミュニケーション力	15%	相手の主張に耳を傾けることができず、自分の主張もうまく伝えることができず、チームとしてのコミュニケーションを深めることができない。	相手の主張に耳を傾けるとともに、自分の主張を適切な言葉で伝えるなど、チームワークを発揮するための、コミュニケーションを円滑に深めることができる。	意見が異なる相手の言葉に耳を傾けながらも、自分のアイディアや思いを適確に伝え、双方向のコミュニケーションを取り、チームワークを発揮して、最適な解を導き出すことができる。
3	思考力・判断力・表現力	20%	チームメンバーで、お互いの意見を共有しながら、論理的に思考を深めたり、上手く説明することができない。	チームメンバーでお互いの意見を共有しながら、情報を整理・分析し、情報の抜け漏れを確認しながら、論理的に思考し、説明することができる。	チームメンバーで多面的に情報を整理・分析し、比較・検討を行った上で意見をまとめ（融合し）、より納得感の高い論理的な意思決定ができるとともに、上手く説明することができる。
4	課題発見・解決力	20%	授業で習った方法論やフレームワークを用いることができず、課題とその原因を整理したり、解決策を提案することができない。	授業で習った方法論やフレームワークを用いながら、課題とその原因を整理し、解決策を提案することができる。	授業で習った方法論やフレームワークを用いながら視野を広げ、より多角的に、深く、課題とその原因を整理し、解決策を提案することができる。
5	関心・問題意識の醸成	20%	授業で学んだこと社会で起きている事象を関げる視点を持てない。	授業で学んだことと社会で起きている事象を関げる視点を持ち、結びつけながら学んでいる。	授業で学んだ領域にとどまらず、関連の領域で起きている社会的な事象についても、主体的に学びを広げている。
6	目標設定の達成	10%	授業で設定されている目標を理解できて居らず、達成しようという意欲を持てない。	授業で設定されている目標を理解し、達成することができる。	自分で目標設定ができ、授業で設定されている目標以上の成果を達成できる。

また、基礎演習Ｂでは、「基礎演習Ａで学んだ、姿勢や態度、心構え、スキルについて、PBLを通じてグループワークの中での応用的に実践しながら学びを深めていくこと」が目標としており、ジェネリックスキルはもちろんであるが、よりアカデミックスキルへと結びつけるような「課題発見・解決力」「関心・問題意識の醸成」を高くしている。

４．ルーブリック導入プロセス

（1）スクライビングによる授業プロセスの可視化

第３回の研修会において、ルーブリックを授業に導入するプロセスの一環としてスクライビングを行い、授業プロセスを可視化した。具体的には、①発表者が授業概要を発表し、別の先生が発表を聞きながら授業プロセスを整理、板書する、②実際の授業内容・プロセスと育つ力を紐付け、③授業でさらに育てたい力を考え、新たな可能性を探ったり、今後の授業のアプローチを考え授業をデザインしたりした。

（2）ルーブリックの活用とリフレクション

第４回の研修会では、今期のルーブリック作成と導入に関する振り返りを通してルーブリックの価値や教育活動を俯瞰した。研修会に出された意見としては、以下のような点が挙げられる。

成果としては、「教員間で教育目標、教育方針が明確化（可視化）でき、共有された」「評

価視点の明確化により、（ａ）学生にとって評価指標がクリアになり、学生に学習意図やゴールを意識させることで学びを促せるようになった（モチベーションが上がった学生もいた)、（ｂ）教員も成績がつけやすく、学生に評価観点からの学習を促進させることができた」「学生への問題意識の醸成ができた」「振り返りが苦手な学生が振り返りをしている様子が見えた」などが指摘された。

一方、課題や改善点としては、「通常授業時の活用方法が難しかった(各回の授業案とルーブリックの関連付けがうまくできなかった)」「具体的なルーブリックによる成績評価が困難だった」「グループワークが多くなる基礎演習の後半は個人の評価をするのが難しかった」「FAとのルーブリックの共有が薄かった」「アピールする学生がわかるが、そうでない学生を見きれない」「評価尺度（基準）における区別が曖昧になり評価に使いきれなかった」「度合いを示す言葉はもっと具体的な言葉に落ちていると使いやすい」などが指摘された。

５．おわりに

本稿を締めくくるにあたり、今後に向けた改善点を３点指摘しておきたい。第１に、今回の報告の結果にもとづいて次年度以降もモデル授業案やシラバスへ反映することであり、FAと教員相互によるルーブリックの授業導入とその後の課題についての情報共有が求められることである。第２に、FAと教員による事前打ち合わせの徹底である。ルーブリックはFA研修を通じて、事前に共有されているが、今回は教員主導でルーブリックの作成と導入を行った結果、FAとの細部に至る共有が困難だったと言わざるを得ない。第３に、そのためには今後も継続して、教員およびFAのファシリテーションスキルやコーチングスキルの向上も不可欠であり、これらは今後の学部FD活動へ展開することが重要であると思われる。

＜謝辞＞

本稿を作成するにあたり、株式会社and seedsのレポート利用させていただいた。この場を借りて、衷心より感謝の念を表する次第である。もちろん、表現上の誤り等があれば、すべてそれは筆者の責任に帰す。

注

1　例えば、「コミュニケーション力」において、基礎演習Ａでは「他者に対して主体的に関わること」を、基礎演習Ｂでは「チームワークを発揮するための主体的な関わり」を意識しており、「思考力・判断力・表現力」においては、基礎演習Ａでは「個人として」、基礎演習Ｂでは「チームとして」の意味合いを持たせている。